

六十二 小小説拾遺五 或る家の伝承

この文書は、最近ある居士の文箱から見つかったという。自家の子や孫のために記した覚え書きと見受けられる。文章は少し硬くて艶に欠け、小説とするのは気がひけるが、伝承の部分に捨てがたいおもしろみがあるので、とりあえず「小小説拾遺」に収録しておく。

八月六日の朝、集合時間七時の五分前に行ったら作業はもう始まっていた。当番の班への招集文によれば、盂蘭盆会の近づいた今日、小山の上に数基残っている「無縁仏」の掃除。九十二歳の老婦人も三輪自転車で駆けつけた。共同体がかろうじて残存しているのである。隣のもう一つの小山には我が家の古い方の墓があり、そのまわりにも無縁墓がいくつかある。石にはたいいてい名が刻んでない。今日掃除をした墓の一つには名が彫ってあったが、今はもちろんその家名の家はこの浦にない。

我が家の墓はのり面が藪になった狭い柵田状のところにある。右手は親族の墓地だが、今年老母を亡くした当主が墓を移した。張つてあるコンクリートの下で斜面の土が流れるので、便利のよい霊園の一画を買ったのである。九段の急な階段を登りそこから七十歩余

り山路を上がるのを都会に出た兄姉が嫌ったという。墓屋も累代墓を移動するのを断ったそうだ。築く時にはできた力仕事を今ではする人がいない。立派な石組は、我が家の土葬の上の十基の石の右手に残り、「源太郎太（そう）だった、弟は弥助」と呼ばれた人の子孫は、石に託して苗字をここに残すことになる。その苗字は、明治維新のおりに、北の日本海に浮かぶ孤島見島に居住していた同族の家の人が、見島牛を一頭船に乗せてやってきて、同じ氏を名乗るようにと勧めたことに由来する。先方では以前からその氏名を使っていたのだ。我が家の墓地の左手は先年すでに引き払われて、雑草が十数基立つ土葬の墓石を覆い隠さんばかり。下側では、あと三軒の家の合葬墓が守られている。この小山に墓参りに来る人が今しばらくはいるわけである。我が家の伝承を孫がその子に伝えれば、見島牛が海を渡ってきた昔話は残るだろう。

北にある見島から見島牛を連れてやって来た人があると聞いた少年期、大きな土産をもつて来るぐらいだから、こちらを源流として来たものと思っていた。ところが、先年、市内の別の集落の同姓の家では見島からやって来たという話が伝わると聞いて、我が家の墓の状態と照らし合わせると、見島から来たというのが本当なのかもしれない、と思うようになった。昔話に出る源太郎の墓の右に次の代の與七の墓がある。與七の右側には名も彫

られていないただの石が四個置いてあるだけ。源太郎の左側は與七の代の者たちで明治の年号の墓だ。我が家の言い伝えでは、見島の方の家は藩政時代大きな土地持ちだったが、明治維新後しばらくして東京へ出たという。いつだったか、その苗字の家が見島にあったと書いてある文章を見たこともある。だから、我が家の墓の状況は見島のその家よりも新しいと告げているように見える。

ふと、見島とその姓をキイワードにしてインターネットで検索してみようというアイデアが浮かんだ。そして、一つだけ見島在住の人のブログが見つかった。その記事に、八町八反の田んぼのことが書いてある。そこは干拓地で、工事は、江戸時代後期こちらの郡から見島に渡った人のころ、あるいは、大火があったころに行なわれたと伝わる、と。その文は見島に渡来した人に最初から大地主という言葉を使っているけれども、その干拓地を所有するようになって地主になったのだろう。この伝承が本当たとすると、少年の考えたようにこちらの家から見島に渡ったのだろう。土産の見島牛はやはりその証かもしれない。すると、我が家の先祖の墓のようすからして、大地主になった人はずいぶん辛抱して働いてそうなったと考えなければならぬ。しかし、こちらの家がより古くからあったとすると、古い墓石の数の少ないことが疑問になる。源太郎の墓の年号は天保だ。その親の名は源二郎と分かっているが、名を刻んだ墓石はない。右側の名のない石がそうだろうか。

こう考えていて、隣家はよそから移ってきたという昔話を父がしていたことを想い出した。我が家の大正以後の墓は別の山のこれまた斜面にある。柵になった墓地の数は多い。そこには隣家の墓もあるが、古い墓の年号は寛政だ。源二郎と世代が重なるだろう。もし我が家がそれよりも何代か前からあって、源太郎の墓のあるところに埋葬していたのだとすれば、昔は土葬して土に返ったところにまた新しい遺体を埋葬したものか。今となっては、成人して関心がうすれ父に詳しい伝承を聴かなかったことが悔やまれる。

けれども、こういう話に熱心になってもいけない。源太郎に跡継ぎがなくて、家はとり子とり嫁が継ぎ、養子の與七の子孫がこの集落から出た同姓の一族である。家の名を継いだ養子が血縁の人だったとしても、ヨーロッパの家名の使い方からすると、プランタジネット家がノルマン家を継いだようなものだ。いやいや、そんな名のある王家のことを譬えにしてはいけない。わたしは、名もない地下(じげ)の者の血筋なのだ。いずれにせよ人は、元来、無位無官の赤肉団塊として生まれ、器水であることを終えたら墓に入り、土に返るのである。生きているあいだは、あの同族の人のように努め励むことにしよう。